

“O, How This Mother Swells Up toward My Heart!”

——*King Lear*における放浪の諸相——

滝 川 睦

I

Shakespeareの*King Lear*（1605-06年頃制作？以下*Lr.*と略す）の種本である*The True Chronicle Historie of King Leir and His Three Daughters*（1605年出版、以下*Leir*と略す）の第24場は、Cordeliaの原型とも言うべきCordellaが彼女の夫the Gallian Kingとともに、田舎人に身をやつして登場するところから始まる。

KING. This tedious journey all on foot, sweet Love,
Cannot be pleasing to your tender joynts,
Which ne're were used to these toylesome walks.

CORDELLA. I never in my life tooke more delight
In any journey, then I do in this:

.....

Lord, how they [country folk] labour to bestir themselves,
And in their quirks to go beyond the Moone,
And so take on them with such antike fits,

That one would think they were beside their wits! (2093-97, 2102-05)

Cordellaたちが逍遙するフランスの海岸が、“the sea side, / Which is very neere” (*Leir* 21. 1857-58) という描写によって、Kingの宮殿からほど遠からぬ海岸と設定されているにもかかわらず、上に引用した台詞においては、“[t]his tedious journey”とか“these toylesome walks”という表現を用いることで、ことさら二人が放浪しているかのように描かれているのは何故だろうか。しかも田舎の人びとが「機敏な動き」(“quirks”)や「道化た振る舞い」(“antike fits”)を交えて祝宴を開いているような描き方がされているのは何故か。

その答えは、上の台詞が語られた直後の、King Leirと彼に仕える忠臣Perillusの登場と密接に関連している。Leirはフランス海岸にたどり着いたとき、自分の置かれた状況をこう述懐していた——

Were ever men in this extremity,
In a strange country, and devoyd of friends,
And not a penny for to helpe our selves? (23. 2038-40)

放浪者としてフランスの岸辺にようやくたどり着いたLeirとPerillusの有様をこの台詞はよく伝えている。つまり、Cordellaとthe Gallian Kingの逍遙のさなかに実現される、彼女と父親の再会は、女王然とした娘Cordellaと尾羽打ち枯らした父Leirとのそれであってはならず、身をやつした者同士が互いに許しあえるような再会でなくてはならないから、というのが先ほどの問い——何故Cordellaたちは放浪しているかのように描かれているか——の答えなのである。そして農民たちによって賑やかに催される宴は、*As You Like It* (1600年頃制作?)におけるDuke Seniorの宴(二幕七場)がそうであったように、放浪者たちを暖かく迎え入れる、歓待の精神が存分に発揮される場でなくてはならないのである。

ところが*Lr.*においては、このCordellaの逍遙に相当する場面はカットされている。Learの宮廷から追放された、フランス女王としてのCordeliaが再びわれわれの前に現れるのは、Folio版によれば四幕四場、太鼓を打ち鳴らし、旗を翻すフランス兵士を従えて英国に帰還する場面である。

CORDELIA. Alack, 'tis he [Lear]. Why, he was met even now
 As mad as the vexed sea, singing aloud,
 Crowned with rank fumiter and furrow-weeds,
 With burdocks, hemlock, nettles, cuckoo-flowers,
 Darnel and all the idle weeds that grow
 In our sustaining corn. [to Officer] A century send forth;
 Search every acre in the high-grown field
 And bring him to our eye. (4.4.1-8)

*Leir*における逍遙の場面とは違い、Cordeliaのかたわらに、彼女を支える夫King of Franceはいない。Cordeliaは放浪者としてではなく、「苦しみから自然を解き放つ」(“redeems nature from the general curse” *Lr.* 4.6.202) 戦士としてこの場に登場するのである。エグザイルでありつつも、その放浪性を払拭されたCordelia。*Lr.*が初演された当時の観客にとって、このCordelia像は、Armadaの海戦にのぞみTilburyに集結したLeicester伯率いる軍隊を前に、「女性の体が弱くて、か細いことは承知していますが、私には国王の、それも英国国王の勇気と気概が備わっているのです」(“I know I have the body of a weak and feeble woman, but I have the heart and stomach of a king, and of a king of England too...” Neale 302) と、士気を鼓舞したElizabeth Iを彷彿とさせたに違いない。

しかしわれわれは、英国に帰還したCordeliaにElizabeth Iの残像を読みとるのではなく、四幕四場において、エグザイルであるはずのCordelia像から放浪性が徹底的に払拭されている理由こそを、問わねばならないのである。

本論文の目的は、劇空間における女性登場人物の移動・漂泊と、近代初期英国における放浪の概念との関連性に焦点を合わせながら、*Lr.*を分析することである。

II

*Lr.*における女性の移動と放浪について論じる前に、*Leir* 24場に描かれたCordellaの逍遙がすでに21場において、the Gallian Kingの家臣Mumfordによって“progress”と表現されていたことに注意を向けておきたい――

KING. Prithy, Lord *Mumford*, what promise did I make thee?

MUMFORD. Fayth, nothing but this,

That the next fayre weather, which is very now,

You would go in progresse downe to the sea side,

Which is very neere. (1854-58)

“progress”が“journeying, travelling, travel; a journey, an expedition” (*OED sb.* 1) を意味するだけでなく、“A state journey made by a royal or noble personage, or by a church dignitary; a visit of state” (*sb.* 2) をも意味することを考慮するならば、ここでMumfordは王と女王を、単に散歩ではなく、お忍びの「行幸」へと誘っているとも解釈できるのである。そして、かつて「物乞いをする者のお腹の中を、国王が行幸する」(“a king may go a / progress through the guts of a beggar” *Hamlet* 4.3.29-30) とHamletに語らせたShakespeareはおそらく、Mumfordの言葉“progresse”に敏感に反応したに違いないのである。この言葉に触発されて、国王の行幸が同時に、国王の放浪ともなるような芝居を創作してやろうと、かの劇作家が考えたとしてもあながち牽強付会とは言えないのではないか。

Gonerilが、彼女の館に滞在しに来たLearを追い立てるきっかけとなったのが、Learと、彼に仕える騎士たちの狼藉であったことをここで思い出しておきたい。

GONERIL. By day and night he [Lear] wrongs me. Every hour

He flashes into one gross crime or other

That sets us all at odds. I'll not endure it.

His knights grow riotous and himself upbraids us

On every trifle. (1.3.4-8)

GONERIL. Here do you [Lear] keep a hundred knights and squires,

Men so disordered, so debauched and bold,

That this our court, infected with their manners,

Shows like a riotous inn. Epicurism and lust

Makes it more like a tavern or a brothel

Than a graced palace. (1.4.232-37)

そしてこの狼藉は、ルネサンス期英国における国王の行幸が、ホスト役を務める貴族の館にもたらしたであろう混乱と、正確に呼応しているのである。歴史家Lawrence Stoneは、Elizabeth I

の巡幸が貴族邸にもたらした狼狽と混乱を以下のように説明している——

Erratic and destructive as a hurricane, summer after summer Elizabeth wandered about the English countryside bringing ruin in her train, while apprehensive noblemen abandoned their homes and fled at the mere rumour of her approach. (453-54)

この「ハリケーン」を目の前にして、貴族の狼狽ぶりは相当のものだったようである——早くも1570年代においてBedford伯は、彼の所領Cheniesが行幸の目的地とならないように画策し、Sir Henry Leeは、女王の滞在が自分の館の破滅を意味すると頭を抱え、Sir Thomas Arundellにいたっては、彼のWardour Castleが巡幸先の候補として選ばれぬように、そのCastleの名が行幸の時期に女王の前で言及されないよう神経をとがらせていた、と伝えられる(Stone 454)。館の景観を整え、居住空間を女王一行に明け渡し、それでいて恩恵らしい恩恵を受けることが期待できない貴族にとっては、Felicity Healが指摘するように、行幸は「ロジスティックな悪夢」(“a logistic nightmare” 46)以外の何ものでもなかっただろう。Edmund Spenserは*The Shepheardes Calender* (1579年出版)の四月のエクログ(*Ægloga Quarta*)において、「天使のような顔立ち」(“angelick face” 64)をした、三美神かと紛うばかりの「麗しのイライザ」(“fayre Elisa” 46)ことElizabeth Iが行幸に臨む様子を歌っているが、現実の行幸はそれとはかけ離れたものだったようである。その意味において、上に引用した、Learと騎士たちの狼藉に向けられたGonerilの非難は、行幸という「悪夢」を体験したルネサンス期英国貴族たちの憤りを雄弁に語っているとも言えるのである。ひと月ごとに娘の宮廷を訪れようとするLearは、夏が巡ってくるたび毎に英国各地の貴族邸を訪れた近代初期英国の国王の分身なのである。

したがって、Gonerilの館を後にしたLearによって、KentとFoolと共になされる荒野の彷徨は、娘の宮廷においてそのネガティブな面のみがあぶり出される、国王による行幸の変奏であると言えよう。

LEAR. Is man no more than this? Consider him [Edgar] well. Thou
ow'st the worm no silk, the beast no hide, the sheep
no wool, the cat no perfume. Ha? Here's three on's
us [sic] are sophisticated; thou art the thing itself. (3.4.101-04)

Learがこのように人間のありのままの姿を看破してみせるとき、彼の目の前にその哀れな姿を曝す“Poor Tom” (3.4.143)としてのEdgarは、ルネサンス期英国の行幸を挙行する国王に、「汝自身を知れ」(*nosce te ipsum*)の主題を鏡のように提示してみせる、スペクタクルの役を担っているとみなすことができるのである。つまり、Learの荒野における放浪は、「よけいな飾り物」(“the superflux” 3.4.35)をかなぐりすてた真の人間の姿を感得するために不可欠な行幸の謂に他ならなかったわけである。

1581年、IslingtonのAldersgateから馬に乗ってロンドン郊外に向かおうとしていたElizabeth

I を、大勢の浮浪者たちが取り囲み、女王を大いに当惑させたという。Elizabethはこの直後にロンドン市長と記録官に令状を出させ、74名の浮浪者を逮捕し、彼らを懲治監Bridewellに送り懲罰を与えたという記録が残っている。さらに1601年8月5日には、“Grenwich”を起点とした、“castle of Windsore”を経由する行幸を実施するにあたり、Elizabeth Iはありとあらゆる種類の、「主人に仕えていない人びと」(“masterless men” Cole 164) や少年、浮浪者、ならず者、いかがわしい女性たちを、半日間にわたって宮廷から遠ざける旨の布告を発令した(Cole 163-64)。これらのエピソードや布告もまた、浮浪者としての国王が主人公となる芝居を構想していた劇作家に、何らかのインスピレーションを与えたことは十分に考えられることなのである。

III

これまでの*Lr* 批評が、放浪と女性との関連性についてどのような形で論じてきたのかを検証するのに適した二つの研究を瞥見しておきたい。William C. Carrollの*Fat King, Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*に収められた論考“‘The Base Shall Top th’Legitimate’: King Lear and Bedlam Beggar”と、Linda Woodbridgeの*Vagrancy, Homelessness, and English Renaissance Literature*に所収された研究“Lear, the Homeless King”である。

前者の論考は、次のような近代初期英国の放浪者に備っていると考えられていた、脱領域的・転覆的特質に焦点を合わせつつ、*Lr* を分析している。

Vagrants were thus considered a physical threat as well as a philosophical one, because their very nature was to cross boundaries, to transgress categories of all kinds. Their actual wandering over the rural roads and urban streets of the kingdom is the external figure of their equally radical slippage between other conceptual and political categories. Like a “wandering Plannet,” disrupting an older cosmic system of order and hierarchy, vagrants were transgressive by definition, by their very status. (Carroll 6)

本劇においては、欠如＝剥奪 (deprivation) の状況におかれた浮浪者と国王が、合わせ鏡のように対峙することによって、権威と服従、富と窮乏、アイデンティティーと無、という伝統的な二項対立が脱構築されていく過程が描かれていると、Carrollは指摘する(185)。こうしたCarrollの明察の射程に入ってくる登場人物は、あくまでも男性登場人物——Edgar、Edmund、そしてLear——であり、Cordeliaなどの女性はこの脱構築的読解の死角に入り込んでしまっているのである。

一方Woodbridgeは、*Lr* において家＝家庭 (home) を核にして形成される求心的意識と、家＝家庭を喪失したノマド的な離散・移動 (diaspora) とが極端な形で表現されている、と指摘した

うえて、家=家庭から離脱していく者たちが描く軌跡を次のようにまとめている——

Here, then, is the pattern: the princess Cordelia, expelled from home and dying a criminal's death, hanging; the Duke of Gloucester, reduced to an icon of blind beggary and vagrancy; his elder son, turned into a homeless bedlam beggar; the Earl of Kent, clapped in the stocks like a thieving vagrant; the king himself, sleeping in straw like the vagrants who sheltered in barns, hustled from country to country, just ahead of hostile authority. (224)

エグザイルとしてのCordelia、そしてGonerilやReganの動きもしっかり批評の視座に取り込んだ、この構造主義的分析に欠落しているのは、歴史的パースペクティブである。Patricia FumertonやFiona McNeillの、近代初期英国を漂泊していた女性たちに焦点を合わせた研究の基軸となっている、歴史的パースペクティブこそWoodbridgeの分析に援用されねばならないのである。

本劇において宮廷や家を離れて劇空間を移動し続けているのは、Edgar、LearあるいはKentだけではない。Learの宮廷から追放されるCordeliaも、自分の宮廷に留まろうとしないGonerilやReganもノマド的生を生きていると言えるだろう。

CURAN. I have been with your father and
given him notice that the Duke of Cornwall and
Regan his Duchess will be here with him this
night.

EDMUND. How comes that?

CURAN. Nay, I know not. (2.1.2-7)

LEAR. 'Tis strange that they [Regan and Cornwall] should so depart from home
And not send back my messenger.

KNIGHT. As I learned,
The night before there was no purpose in them
Of this remove. (2.2.193-96)

上に引用した二つのやりとりは、ReganやCornwallだけでなく、何故Gonerilも“home”から離れ、Gloucester邸に来なければならないのか、というわれわれ観客が抱く疑問と軌を一にするものである。Regan自身の説明——「父も、姉も手紙を書いてよこしたが/双方の言い分が違う、したがって最善の方法は/我が家から離れて返事すること」“Our father he hath writ, so hath our sister, / Of differences, which I best thought it fit / To answer from our home” (2.1.124-26)——も、ReganとGonerilは、EdmundのいるGloucester邸に無意識のうちに惹きつけられていたからという解釈も、あるいはWoodbridgeが示唆しているような、彼女たちの移動は、

*Lr.*に遍在する、パターン化された「ホームレスネス」を補完するものだからという説明も、われわれの上記の疑問に対して部分的にしか答えてはくれないのである。本劇にみられる女性たちの移動の背景には、近代初期英国における女性の放浪という社会的問題が潜んでいるのではないだろうか。

歴史家 Roger B. Manning は、16 世紀末においてイングランドとウェールズ全体で 1 万 6 千人から 2 万人に膨れあがった浮浪者が、何故当時の人びとの不安を掻き立てたかを次のように説明している。

Vagrants were also feared because they were thought to have rebelled against the patriarchal authority of family and household; many of them had, in fact, deserted husbands or wives, or had run away from masters. Their very idleness was thought to constitute another act of rebellion. They were rootless and without visible ties of kinship. They did not enter into durable marital or familial relationships. Because vagrants were highly mobile they were regarded as spreaders of seditious rumours and also of disease. Vagrants were also considered to be prone to disorder, and Tudor statesmen assumed that they furnished the bulk of those who participated in rebellions and riots. (163)

家父長制度の桎梏から解放された、根無し草的存在である “masterless men” や “masterless women”¹⁾ が浮浪者の多くを占め、彼らが社会的秩序を根本から脅かすとみなされていたわけである。とくに、1602 年当時のロンドンだけで 1 万 7 千人いたとされる “masterless women” の存在は、近代初期英国の社会的不安を強く煽ったようである (McNeill 150)。そしてそのような女性たちを代表するのが、Paul Griffiths が *Youth and Authority: Formative Experiences in England 1560-1640* で挙げている Jane Sellars であり、未亡人 Bensley の娘である。

Jane Sellars は、1623 年 6 月に Norwich の路上で浮浪者として身柄を拘束され町の Bridewell に送られて以来、路上生活、Bridewell 送致、親方の下での徒弟生活を交互に、幾度も繰り返した人物である (Griffiths 351-52)。同じく Norwich 在住の未亡人 Bensley の娘の場合は、「ふしだらでみだらな生活」 (“lewdnes and ill rule”) を送り、娘を食べさせることができない母親の下にあって、親方について徒弟奉公をすることもなく (“out of service”)、 「自活して」 (“at her own hand” Griffiths 381) いたという理由で告発されたのである。後者の例などは、路上生活をしているか、いないか、あるいは働いているか、いないかというファクターとは別に、家父長制度における権威者——父親、夫、親方——の監視下に置かれていない女性は、社会の治安を乱すおそれのある “masterless women” として、放浪者のレッテルを貼られるおそれがあったことを雄弁に物語っている (Fumerton 15-17)。

もちろん、こうした歴史的パースペクティヴを備えた研究が明るみに出す “masterless women” が、近代初期英国社会の底辺に位置する貧しい女性たちであること、そして *Lr.* に登場

する女性たちが、そうした貧しい女性たちとは身分を大いに異にしていることは銘記しておかねばならない。しかしそれでもなお、Learの娘たちもまた、家父長制度の束縛から解放され、父親や夫に反旗を翻すという点において、Manningが定義する、近代初期英国における放浪者と不即不離の関係にあった“masterless women”に属すると言えるのではないだろうか。

LEAR. Dost thou know me, fellow?

KENT. No, sir; but you have that in your countenance
which I would fain call master. (1.4.26-28)

上の引用における、“masterless man”に身をやつしたKentがLearに対して使う“master”、そしてGloucesterの台詞——「たとえそのことで命を落としても……わが主人である王は救われねばならない」“If I die for it . . . the King my old master must be relieved” (3.3.17-18)——で使われている“master”が、本劇における家父長制度を支える鍵となる言葉であるとするならば、父親に寄せる愛情の多寡を問われて“Nothing” (1.1.87) と答えるCordeliaも、夫の死から程なくEdmundと愛の契約を結ぶReganも、そして次のように夫Albanyを罵倒するGonerilも、家父長制度の規範から逸脱した“masterless women”であることは間違いない。

Milk-livered man,

That bear'st a cheek for blows, a head for wrongs,
Who hast not in thy brows an eye discerning
Thine honour from thy suffering; that not knowst
Fools do those villains pity who are punished
Ere they have done their mischief. Where's thy drum?
France spreads his banners in our noiseless land;
With plumed helm thy state begins to threat,
Whilst thou, a moral fool, sits still and cries,
'Alack, why does he so?' (4.2.51-60)

二幕二場、Reganによってさらし台 (stocks) にかけてられたKentの姿を見て、Learはこう叫ぶ——

O, how this mother swells up toward my heart!
Hysterica passio, down, thou climbing sorrow,
Thy element's below. Where is this daughter? (2.2.246-48)

胸にこみ上げてくる悲しみを、Learは“*Hysterica passio*”と名付ける。英語で“the mother”あるいは“the suffocation of the mother”と呼ばれ、息苦しさ、窒息させられるような感覚、身体の部分的麻痺、けいれん、失語症、感覚麻痺などの症状を伴うこの“*Hysterica passio*”は、子宮 (*hyster*) が起こす女性特有の病と考えられてきた (Kahn 33)。Lr. 初演当時出版された、Edward Jordenによる医学書——*A Briefe Discourse of a Disease Called the Suffocation of*

the Mother (1603) —— は「子宮が本来の位置から身体上部や側面へ移動し、近接する部位を圧迫すること」(“the rising of the Mother wherby it is sometimes drawn vpwards or sidewards about his natural seate, compressing the neighbour parts” 5)、つまり子宮が体内を「放浪すること」(‘wandering’ Adelman 114) によってこの病気が引き起こされると説明している。

Janet Adelmanのように、この台詞にLearの女性化された姿を読み込むことも十分可能なのであるが(Kahn 113-14)、放浪という観点からLr.を検討しているわれわれには、Learの体を下部から上部へと、あるいは側面へと移動するこの“this mother”こそ、劇中の女性たちによる家=家庭からの離反、そして移動を暗示していると解釈することも可能なのである。なぜなら、次の台詞に表されているように、Learにとって娘たち、とくにCordeliaは、彼を慈しむ母なる存在でなくてはならなかったからである。

LEAR. I loved her [Cordelia] most, and thought to set my rest

On her kind nursery. (1.1.124-25)

そうした母なる存在としての娘たちが、「親子の縁を切った者」(“a stranger to my heart and me” 1.1.116) として、宮廷や家から遊離し、劇空間を漂泊する様を、Learは無意識のうちに“O, how this mother swells up toward my heart!”と表現していたのではなかったのだろうか。

V

では、宮廷や家を離れ、劇空間を移動するという点でGonerilやReganと同じ演劇的位相に位置するはずのCordeliaが、英国の土を再び踏むとき(四幕四場)、エグザイルであるはずの彼女から、その放浪性が払拭されているのは何故か。その答えは、Learの三人の娘たちと劇中で相同的関係を結んでいる、Gloucesterの腹違いの兄弟EdgarとEdmundの関係を検討することによってより鮮明に導き出されることになる。

Carrollは、Poor Tomに扮して荒野を彷徨するEdgarと、次にその一節を引用する、Thomas Dekkerの*The Belman of London* (1608年出版) や*O per se O* (1612年出版) などの当時の悪漢文学 (the Rogue Literature) に登場する悪漢や放浪者 (Abraham-man、abram cove) には、類縁的關係が存在することを指摘している。

... he [*an Abraham-man*] sweares he hath bin in bedlam, and will talke frantickly of purpose; you see pinnes stuck in sundry places of his naked flesh, especially in his armes, which paine hee gladly puts himselfe to (beeing indeede no torment at all, his skin is either so dead, with some fowle disease, or so hardned with weather,) onely to make you beleeeue he is out of his wits: he calls himselfe by the name of *Poore Tom*, and comming neere any body, *cryes* out, *Poore Tom* is a cold. (*The Belman of London* 101)

Some of these abrams have the letters E and R upon their arms; some have crosses, and some other mark; all of them carrying a blue colour. Some wear an iron ring, etc. Which marks are printed upon their flesh, by tying their arm hard with two strings three or four inches asunder, and then with a sharp awl pricking or razing the skin to such a figure or print as they best fancy. They rub that place with burnt paper, piss and gunpowder, which being hard rubbed in, and suffered to dry, sticks in the flesh a long time after. (*O per se O* 372)

だがしかし、家から放逐される／逐電するEdgarが放浪者に扮する際に、手本としなければならなかったのは、こうした悪漢文学のAbraham-manなどではなく、自分の腹違いの弟Edmundの身振りや声なのである。兄Edgarを陥れるためにEdmundが採用するのが、他ならぬ放浪者のジェスチャーや声音だったからである——

EDMUND. Pat he [Edgar] comes, like the catastrophe of the old comedy.

My cue is villainous melancholy, with a sigh like Tom
o'Bedlam. – O, these eclipses do portend these
divisions. Fa, sol, la, mi. (1.2.134-37)

このメタシアトリカルな台詞で言及されている“Tom / o'Bedlam”とはまさしく、Edgarがこれ以後扮していかねばならないPoor Tomのことである。Edmundが利用するのは「ベドラム病院のトムのため息」だけではない。彼が偽造した、Edgarの筆跡を真似て書かれた手紙も、ルネサンス期英国の放浪者・悪漢が、権力者の目を欺くためにこしらえた偽造文書を連想させずにはおかない。次の引用は、「ならず者」(“A Rogue”)が偽の手紙や通行証を携帯していることを、Thomas Harmanが*A Caveat for Common Cursitors Vulgarly Called Vagabonds* (1566年出版)で告発するくだりであるが、偽りの権威を文書に与え、それを所持する人物に権利を付与するという意味において、「ならず者」が携える手紙・通行証とEdmundが偽造する手紙とは非常に近い関係にあると言えるだろう。

Either that he [a Rogue] hath a letter to deliver to some honest householder dwelling out of another Shire, and will shew you the same fair sealed, with the superscription to the party he speaketh of, because you shall not think him to run idly about the country; either have they this shift: they will carry a certificate or passport about them from some Justicer of the peace, with his hand and seal unto the same, how he hath been whipped and punished for a vagabond according to the laws of this realm, and that he must return to T. where he was born or last dwelt, by a certain day limited in the same, which shall be a good long day. (120-21)

兄と激しく切り結んだ印象を与えるために、Edmundが自分の腕に傷を負わせる(二幕一場34-36行)という手口も、上に引用した*O per se O*が告発する“abram cove”の手管——好みの役柄

を演じるために、腕に二本の紐を巻きつけ、突き錐でついたり、傷つけたりすること——に似てはいないだろうか。そしてなによりも、Edmundが兄や父親を欺くときに存分に発揮する演劇性は、1572年発布の浮浪者取締法および救貧法 (An Acte for the Punishment of Vacabondes and for Releif of the Poore & Impotent) において「役者」(“Comon Players in Enterludes”) もまた浮浪者 (“Roges Vacaboundes and Sturdy Beggars” Chambers 270) に含まれていたことからわかるように、放浪者・悪漢に備わる演劇性であったはずである。

William C. CarrollはEdmundを、兄の筆跡や父の声を真似て、Edgarや父Gloucesterに成り代わろうとした人物ととらえているが(186)、放浪という点に関しては、むしろ事態は逆であると言わざるをえない。Gonerilの宮廷に、その振る舞いがよからぬ影響を与える (“infected with their manners” 1.4.234) という理由で非難されるのは、Learに仕える騎士たちであったが、放浪性という点では、Edmundが放浪者の雛形を提示することによって、荒野をさまようEdgarとGloucesterに強烈な影響を与えているのである。

嫡子Edgarと庶子Edmund。二人は放浪者“Tom / o’Bedlam”の声音やジェスチャーを模倣し、その演劇性を自家薬籠中のものとしているという点では、同じ演劇的位相に立つと言えるだろう。ただし二人は芝居の幕が下りるまで同じ位相に立ち続けるのではない。五幕三場の二人の決闘の場面において、Edgarが声高らかに「私の名はエドガー、お前の父親の息子だ」(“My name is Edgar and thy father’s son”167) と正体を明らかにし、彼に纏わる放浪性をかなぐり捨てるとき、二人の差異は歴然としたものになる。

そして劇の結末において、血を分けた者同士の相同性ではなくて、むしろ差異が強調されるという点では、Learの娘たちについてもGloucesterの息子たちと同様のことが言えるのではないだろうか。父親に愛情を表白する一幕一場においては、あれほど截然と区別して描かれていたCordeliaと二人の姉は、家・宮廷から遊離し、劇空間を移動するという点では、やはり相同的な演劇的位相に位置すると言えるだろう。だが、「私はもはやエドガーではない」(“Edgar I nothing am” 2.2.192) という宣言とともに放浪に身を委ねたEdgarに、最終幕においてアイデンティティーを回復させ、その放浪性を払拭したのと同様に、四幕四場においては、かつて“Nothing” (1.1.87, 89) という言葉を用いてLearへの愛情表現をしたCordeliaに、Shakespeareは「苦しみから自然を解き放つ娘」(“one daughter / Who redeems nature from the general curse” 4.6.201-02) の役を与え、同時に彼女から放浪性を払拭してみせたのである。再び祖国の土を踏みしめるCordeliaは、GonerilやReganがその虜となった「際限のない女性の欲望」(“indistinguished space of woman’s will” 4.6.266) とは、まったく無縁の存在として描かれているのである。

注

* 本稿は平成19年度科学研究費補助金(基盤研究[C] 課題番号18520190)による「近代初期英国における放浪文学と社会的変動との関連性についての研究」の成果の一部である。

1) 近代初期英国における放浪する女性を“masterless women”と呼ぶことの妥当性および必要性に関しては、McNeill 151-52を参照。

引用文献

- Adelman, Janet. *Suffocating Mothers: Fantasies of Maternal Origin in Shakespeare's Plays, Hamlet to The Tempest*. New York: Routledge, 1992.
- Carroll, William C. *Fat King, Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Chambers, E.K. *The Elizabethan Stage*. Vol.4. Oxford: Clarendon, 1923.
- Cole, Mary Hill. *The Portable Queen: Elizabeth I and the Politics of Ceremony*. Amherst: U of Massachusetts P, 1999.
- Dekker, Thomas. *The Belman of London*. 1608. *The Non-Dramatic Works of Thomas Dekker*. Vol.3. Ed. Alexander B. Grosart. New York: Russell, 1963. 61-169.
- . *O per se O*. 1612. *The Elizabethan Underworld: A Collection of Tudor and Early Stuart Tracts and Ballads*. Ed. A.V. Judges. 1930. London: Routledge, 2002. 366-82.
- Fumerton, Patricia. *Unsettled: The Culture of Mobility and the Working Poor in Early Modern England*. Chicago: U of Chicago P, 2006.
- Griffiths, Paul. *Youth and Authority: Formative Experiences in England 1560-1640*. Oxford: Clarendon, 1996.
- Harman, Thomas. *A Caveat for Common Cursitors Vulgarly Called Vagabonds*. 1566. *Rogues, Vagabonds, and Sturdy Beggars*. Ed. Arthur F. Kinney. Amherst: U of Massachusetts P, 1990. 103-53.
- Heal, Felicity. “Giving and Receiving on Royal Progress.” *The Progresses, Pageants, and Entertainments of Queen Elizabeth I*. Ed. Jayne Elisabeth Archer, et al. Oxford: Oxford UP, 2007. 46-61.
- Jorden, Edward. *A Briefe Discourse of a Disease Called the Suffocation of the Mother*. 1603. New York: Da Capo, 1971.
- Kahn, Coppélia. “The Absent Mother in *King Lear*.” *Rewriting the Renaissance: The Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe*. Ed. Margaret W. Ferguson, et al. Chicago: U of Chicago P, 1986. 33-49.
- Manning, Roger B. *Village Revolts: Social Protest and Popular Disturbances in England, 1509-1640*. Oxford: Clarendon, 1988.
- McNeill, Fiona. *Poor Women in Shakespeare*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Neale, J.E. *Queen Elizabeth I*. 1934. London: Penguin, 1990.
- Shakespeare, William. *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre. The Arden Shakespeare. 3rd Ser. London: Thomson Learning, 2006.
- . *Hamlet*. Ed. Ann Thompson and Neil Taylor. The Arden Shakespeare. 3rd Ser. London: Thomson Learning, 2006.
- . *King Lear*. Ed. R.A. Foakes. The Arden Shakespeare. 3rd Ser. Walton-on-Thames: Nelson, 1997.
- Spenser, Edmund. *The Shepheardes Calender. The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*. Ed. William A. Oram, et al. New Haven: Yale UP, 1989. 1-213.
- Stone, Lawrence. *The Crisis of the Aristocracy 1558-1641*. Oxford: Clarendon, 1965.
- The True Chronicle Historie of King Leir and His Three Daughters. Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Ed. Geoffrey Bullough. Vol.7. London: Routledge, 1973. 337-402.
- Woodbridge, Linda. *Vagrancy, Homelessness, and English Renaissance Literature*. Urbana: U of Illinois P, 2001.

Synopsis

“O, How This Mother Swells Up toward My Heart!”:
Some Aspects of Vagrancy in *King Lear*

By Mutsumu TAKIKAWA

In contrast to Cordelia in *The True Chronicle Historie of King Leir and His Three Daughters*, Cordelia in 4.4 of *King Lear* appears, deprived of vagrancy, as a warrior who “redeems nature from the general curse” (4.6.202). The question now arises: why does Shakespeare dare to deprive Cordelia of vagrancy? The purpose of this paper is to elucidate some aspects of vagrancy in *King Lear*, especially putting focus on the relevance between the mobility of female characters and vagrancy in early modern England.

The reproof of Goneril who accuses Lear and his knights of their riotousness, strongly reminiscent of aristocrats’ complaints against royal progresses in Elizabethan England, indicates that Lear’s stay at Goneril’s palace plays a variation on an official journey of royalty. Moreover, it seems reasonable to suppose that Lear’s wandering in the wilderness represents the “darker” (1.1.35) side of the royal progress.

It is important to note that Lear’s daughters also play the parts of wanderer in the theatrical space: Cordelia is banished from Lear’s court and then, returns as an exile; Both Goneril and Regan free themselves from the fetters of patriarchy and make a temporary “amorous sojourn” (1.1.47) at Gloucester’s house. They are clearly representative of “masterless women” in early modern England, who deserted their husbands or run away from masters. One can safely state that Lear’s cry “O, how this mother swells up toward my heart!” (2.2.246) correctly predicts the mobility of his daughters.

The relationship between Edgar and Edmund will offer the clue to finding the reason why the vagrancy of Cordelia has to be eradicated. It is obvious that Edgar, in respect of imitating gestures and voice of “Tom / o’Bedlam” (1.2.135-36), bears a striking resemblance to Edmund. Nevertheless, when Edgar, by casting off vagrancy in 5.3, reveals himself as Gloucester’s legitimate son, he decisively breaks away from Edmund. This is even more true of Cordelia in 4.4, who identifies herself as “one daughter / Who redeems nature from the general curse / Which twain have brought her to” (4.6.201-03).